

商 学部3年のY君は、深夜J君の家でTVゲームをしながら、うとうとと寝てしまった。

「行くぞ！」

男の声が目が覚めた。寝ぼけてはいたが、男たちの手によって自分が外に運ばれていくのが分かった。まだ夢の中にいるのかもしれない。でも、拉致されるのはごめん。Y君は力の限り叫び、暴れた。

「やめろ、やめろ！」

Y君は口をふさがれた。

「静かにしろ！ 近所に響くだろう」

そしてなにやら見覚えのあるワゴン車内に運ばれた。犯人の正体は、サークル仲間だ。少し安心はしたものの、一体この騒ぎは何なんだ？

「甲府行くぞ！」

仲間の1人が日帰り山梨旅行を思いつき、ケータイでJ君を誘って家に迎えに行ったら、隣りでY君が眠っていた。せつかくだから一緒に連れて行くことにしたそう。

思いやりなのか、それとも嫌がらせなのか。憐れなのはY君の格好である。2月の真冬にもかかわらず、

Tシャツに短パン、そして裸足なのだった。旅行どころではない。途中、仲間たちはお金を出しあってコンビニで靴下とスリッパを買って与えた。Y君はそれを履いてしぼしぶ旅に同意することにした。

一行は、武田信玄の総本山、信玄神社で鎧を着て写真を撮ったり、山梨学院大学の敷地内でサツカーをしたり(警備員に怒られたりもしたが)。

一人スリッパのY君はときどき転んだが、楽しい思い出となった。

青春クラフティ
拉致されたY君の白昼夢

《青春とは人生のある期間を言うのではなく》

心の様相を言うのだ。優れた想像力、逞しき意志、燃ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こういう様相を青春というのだ》

——サムエル・ウルマンの詩『青春(Youth)』の一節。

Y君は長く忘れないだろう。夢のもつれ、白昼夢のような、あの日の「青春の1ページ」を。「たしかに拉致する逞しき意志と燃ゆる情熱が、彼らには横溢していた」と彼は笑うのである。(Q)

ミ イト先のミーティングが流れ、**ハ** ではないつにする？という話になった。

「じゃあ14日は？」「あたしはいいけど、H美はどうかかな？」「H美にメールしてみるよ」「H美はその日、お笑い見に行くんだって」「じゃあ、16日は？」「ダメ、あたしその日バーゲン」

こんなメールのやりとりが延々30回。その間2時間。結局決まらずに……おっと、正気ですかい？ 電話なら1、2分で済んだ会話なのに。

ケータイは開放系？ 拘束系？

時間を守るという誠実さは忘れ去られるつある。

ケータイ電話の登場はイマドキの生活を変えた。ケータイがない時期メールを打つ時間なんてなかった。その時間をしていたらどう？

B子の彼はいつもデートの時間を決めない。

「今日、部活の試合あるから、終わったら電話する」。終わるって何時なの？

「終わったよーい」。

電話がかかってきてはじめて、B子は身支度を始める。当然、彼を待たせ

ることになる。「待たせてごめん！」と言いつつ、心のなかで、「私だつてずっと電話を待ってたもん」。

ケータイのおかげで約束の時間は決める必要がなくなった。が、これがケータイの恐ろしいところで、一方でB子のように、ケータイに拘束されて、自分の時間を好きに使えないのも事実。ケータイがない時代は、約束相手との連絡もままならないから、時間に遅れそうになったら必死で走った。今は融通がきく。約束の

《会うまでの時間たっぷり浴びたくて各駅停車で新宿に行く》
とうたったのは、俵万智『サラダ記念日』だけど、それがベストセラーになったのも早や15年ほど前(87年刊)。メールがある私たちの日常ではそんな感覚はもちににくい。便利になった分、「待つ」という恋愛におけるロマンチズムも薄れつつある

……。朔太郎じゃないけれど、
——情緒よ、君は帰らざるかとつぶやいてみたい。(藍)



珍 しく早く帰ってきた父親が夕食を食べていると、末の妹が足音も荒く駆け込んできた。

「テレビ買って——っ!!」

泣き出しそうなほど真剣な様子に父は思わず箸を止め、本を読んでいた母は知らぬ顔ながら、上の妹は新聞からチラッと視線を上げ、C子は隣の部屋から煩わしげに顔を出した。

——そう、21世紀のこのご時世に、わが家にはテレビが無かったのだ。

かくして臨時の「家族会議」が開かれることとなった。議題は「テレビは本当に必要か」。書記役の上の妹はうんざりした様子でノートを広げた。母は本を閉じたものの、「買わないわよ」という姿勢を崩さない。テレビを廃してすでに1年。この議論は下火、というより消えかかっていたからだ。

「だって、だって……」と妹はしゃくりあげ始めた。「授業についていけないんだもん! (泣)」

中学1年の彼女は、社会の授業でオリジナルのクロスワードパズルをやった。問題はほとんどが時事問題や教科書で習ったことだったので、

社会の得意な妹は全問正解の勢いで解答していた。だがあと1つというところで鉛筆が止まってしまった。それは先生が「サービスポイント」として出した、

「人気の二人組のお笑い芸人のコンビ名は?」というふざけた問題で、『○○○○問題』となっていた。他の生徒はクスクス笑いながらさつさと答えを書き始めたのに、妹はさっぱりわからない。仕方がないので、『パレス

ザ・ジャッシー 「わが家にテレビは必要か」

し紛れに解答して提出したら、先生は爆笑しながら大きくバツをつけたという。

「バツじゃないの?!」と高校生の妹が呆れ顔で言った。「だってテレビないからわかんないんだもん!」。けなげでしよ、救いの手はないものか、という場面だけれど、

「……アンタ、まさかお笑い芸人の名前を覚えるためにテレビを買って言うんじゃないでしょうね?」

母の一言に、末の妹は黙り込んでしまった。C子も「根拠薄弱ね」と



肩をすくめた。

もつとも上の妹はいくらか同情的で、ノートを閉じて新聞を広げ直した。

「アンタも読んでみれば?」。差し出したのは「読み終えた」ばかりのテレビ欄。テレビが無いわが家でこんなにも熱心にテレビ欄を愛読している彼女、実はかなり前に「テレビ買って」と抗議した一人だった。

そのときの理由は「友達との会話についていけないから」。すると母は

新聞のテレビ欄を抜き取って彼女に渡した。

「そこにあらずじが書いてあるでしょ」。哀れ、彼女は小さなあらずじと番宣タイトルだけを必死に読んでストーリーを把握することとなっていました。

民主主義を旨とするわが家ではテレビ復活派(妹・妹)とテレビ廃止派(母&C子)が攻防を繰り返してきたが、中間穏健派の父が廃止派に与して、よって採決は常に「テレビはいらない」という結論に落ち着く。

こんな話をすると友人らは、「世にも奇妙な物語」でも観たような(観

たことないけど) マナザシで、「アンタ、よく生きてられるわね!」と同情する。「アタシ、テレビが無かったら絶対生きていけない!」と。そして少し上の世代の人からは「偉いね」と妙に感心されてしまう。いえいえ、うちにも以前はテレビがあったんです。ただ、壊れちゃった後に買い換えていないだけで……。

ちなみにその原因は去年の6月のサッカーW杯。やれイングランド戦だ、日本戦だ、と連日連夜「酷使」された齡十何年のテレビ君、とうとうオーバーヒートしてしまったというわけ。それが決勝戦の翌日だったものだから、「なんて忠義なテレビ哉!」とカンタンしたくらい。

さて復活派の妹たちは、来年のアテネ五輪を機にテレビを復活させようともくろんでいるらしい。「マラソンの高橋尚子!」「ハンマー投げの室伏!」「歴史的瞬間をわが家で!」

でも「4年に1度」のロジックが、「テレビ」墮落論——強固な母の壁を突き崩せるだろうか。「五輪選手めざして自分で出たほうがずっとマシよ」なんて言われそう。(雪)

その日はA子にとって初めて、
づくしの日であった。

彼女は面接のため、スーツでキメ
ていた。この夏のバーゲンで買いそ
ろえたものである。A子は常々「ス
ーツでもパンツスーツにする！」と意
気込んでいたのだが、「地獄の沙汰
も金次第、見た目次第」と、バーゲ
ンでは高めのスカートスーツを買っ
てしまった。靴も、深く考えずに、
見た目が良いからとヒールのあるも
のを買った。

これがまず間
違いだったのだ。

地獄の沙汰も見た目次第 スーツで決めた彼女の就活初日

マッサージ中に
なんと足がつっ
てしまうという

出だしは好調、新鮮な着心地と、カ
ツカツという聞こえの良い音にA子
は満足していた。最寄り駅から会社
まで徒歩15分。歩き心地にやや違和
感を感じ始めながらも、無事たどり
着き、面接も好感触だった。

気分をよくして、A子は意気揚々と
「せっかく都心まで来たんだから
買い物をしていこう！」と、思いつ
きで恵比寿から渋谷まで代官山経由
で歩いていったのだ（A子の家は中
大の近くである。周りには何にもな

い！）。

この道のりは駅—会社間の比では
なかった。スカートはどういうわけ
か回転して、本来なら後ろにあるは
ずのフアスナーがおへその下にくる
わ、履きなれない靴で靴擦れは起こ
すわで、ヒーヒー言いながら渋谷ま
で歩いていった。

帰って靴を脱いでみると、両足の
小指から血がながれ、かかとは大
きな水ぶくれができていた。さらに
マツサージ中に
なんと足がつっ
てしまうという

惨事。

A子は一度も足がつったことがな
かったので、なんとも言えない不安
を覚えたものである。

親元に電話して顛末を話すと、母
親は一言。「お前は昔から、なんか
1つズレてたからね」

これから就職活動を控えた女子大
生の皆さん、がんばりま
しょうね。でも、企業と
スーツ選びは慎重に。

(青)

あなたは理工学部の白門祭にこ
られたことありますか？

多摩キャンパスに比べて、お世辞
にも華やかとはいえないけれど、こ
の学園祭にエネルギーを燃やす女性
がひとり。

理工学部応用化学科3年、加藤由
紀子さん。理工白門祭実行委員会委
員長である。

とても情熱的かつ活動的、こんな
ふうに。

01年から理工
白門祭に「野外
お笑いライブ」
燃える「白門祭」のユツ

が正式にイベントとして組み込まれ
た。これぞ彼女の行動力のタマモノ
である。

野外ライブに出演するのは事務所
などに所属していないフリーのお笑
い芸人たちなのだ。

加藤は原宿の路上で彼らを見つけ
自分で声をかけスカウト(ナンパ?)
してくる。

ギブアンドテイクがしつかり成り
立っているんです」

行動力からくる自信、といえはい
いか。

お笑いライブの他にも、理工学部
の教授による研究室公開、タレント
ライブなど、加藤の手がける企画は
多い。

研究室公開は理系ならではの出し
物だ。加藤の熱心な説得により参加
する研究室も多い。体験型の研究室

があるのも見逃
せない。
「中大の白門

祭といえば多摩のほうが有名ですよ
ね。規模も大きいし、来場者数も多い
でも理工も負けてられませんよ」と、
その目が燃えている。

昨年度の来場者数は多摩に遠く及
ばないが、幅広い年代の方に来てい
ただいた。

では今年目標は？と聞くと「目
指せ！来場者数5000人」だそうだ。
今年の白門祭(10月31日〜11月3

日)、理工も(こそ)熱い!!

(吹)



多

摩キャンパスは自然の宝庫だ。特に夏は、一斉に鳴く蟬に気持ちよさを感じ、夜には、足が胴の5倍以上ある虫やら足が異様に多い虫やら、虫の多様さに、逆に感動するくらいだ。

先日、空き教室でA君と試験勉強をしていた。彼はキャンプによく出かけて、虫に詳しい。ふだんはあまり目立たないA君だが、虫を手玉にとる「プロの技」を目撃することになったのである。

その日は冷房が入っていないから開け放しの窓から虫が入ってくるのは仕方がない。ムシをきめこんで机に向かっていたのだが、イヤな羽音だ、これは。「プウーン」「プウーン」

2匹の大きなクマバチが超高速で旋回していた。身の危険を感じ逃げ腰のシロウトを制して、A君はまるで動じない。電気の半分を消して、「すぐ出て行くよ」と平然と勉強を続けた。

しばらくすると今度は、「カチン、カチン、バチン」クマバチが蛍光灯に体当たりを始

めた。が、シヨックでふらついた1匹をA君は見逃さない。落ちたと見るや、クマバチを瞬時に踏み潰した。

もう1匹はまだ蛍光灯に当たっていたが、ついに落ちてきた。と思った瞬間、カミカゼのようにA君を攻撃しだしたのだ。「テキの大将」と見定めたか、何度も突っかかってきた。A君はついに立ち上がった。教科書を手にするやクマバチの位置を確かめ、大きく息を吸いこんだもの

**良い子は真似しないで下さい。
必殺！クマバチ撃退法**

である。手にも力をこめて、

「あつ！！！！！！！！！！」
A君は突然、鼓膜が破れる程、大きく叫んだ。

クマバチはシヨックで床に墜落。彼はおもむろに教科書を開き、勉強に戻った。――斥巻。驚くことに、クマバチはもう「虫の息」で、部屋を去るまで生き返らなかつた。

A君はというと、試験でヤマが当たったよ、とすぐふる上機嫌であった。「クマバチ？そんなことあった？」みたいな虫も殺さぬ顔して。大物である。通



長

い梅雨がやつと明けた日曜日の早朝、ある会社で部署対抗ソフトボール大会が行われて

いた。そして会場の周りには社員の家族に混じって、明らかに学生とおぼしき数十人の男性集団がいた。

「あれ学生だよな？なんだこんな早く？」「誰かの身内かな、それにしては多いけど……」

数人がいぶかりだしたところで、新入社員・中大OBのAさんがうち明けた。

**OBのソフトボール大会
師・弟の視線の先は……**

男性。つかつかとAさんに歩み寄った。

「ああ、アイツら僕がいたぜミの後輩なんですよ、いって言ったんですけど応援に行くつてきかなくつて……いつまでも先輩べつたりで困ったもんです」

そう言いつつAさんはまんざらでもなかつた。

「Aさんの親衛隊ですわね」
「今どきうらやましいです」

と同期たちはAさんを持ち上げつつも、むつり顔。先刻承知だったのだ。Aさんの後輩たちの本当の目的が、美人が多いことで評判のこの会社の女子社員であることを。大会

の間中、彼らの目は空振りして照れ笑いする女子社員の笑顔やら、彼らの一番人気の受付嬢Hさんの脚線美に釘付けなのである。

（あいつらはお前の親衛隊じゃなくてHさん親衛隊なんだよ！）とにかくHさんをあんないやらしい目で眺めまわすのをやめさせる！！）

……と同期の桜は言いたいものの、ひがみと思われるのもやだから黙っているのだった。その時、グラウンドの脇に1台の車が停まった。中から出てきたのは恰幅のいい初老の

「あつ先生！お久しぶりです！」
「やあAくん、学生たちも行くつて言うし僕も来てみたんだよ」
「そうですか！いや僕は幸せ者です」

感極まっているAさんをよそに、同期の面々は先生の目が、「お局さま」の異名があるものの有能かつ妖艶なY女史を追っていたことを見逃さなかつた……。

なんたる師・弟の好奇心。武士の情けで、ゼミの名は秘すけれど。(猫)

暗

(総政・3年)の心臓のドキ

ドキはいよいよ高まった。音楽のリズムをあげる。そうとでもしなければ……首のあたりがじつとりと汗ばんでいるのを感じ始めていた。

「だからこんな道、来るんじゃないかっただ」とMはしきりに悔やんだ。

友人らと青森のねぶた祭りを見に行ったのである。初めて見る祭りは勇壮で、Mはすっかり気分を良くしていた。普通なら、帰り道は東北自動車道を通って走ってすんなり帰れるはずだった。

ところが友人がよけいなことを言ったばかりに。「八甲田山を通って帰ろう。出るんだって」

何が出るって、もちろんオバケです。「霊気の漂う山だからね、地元では恐れられているよ」と青森出身の友人に聞いていたのだ。「少し、嫌だな」とMは思ったが、口には出せなかった。まわりには女の子がいてかっこ悪いとこは見せられない。……ありがちなことである。

山道に入って15分もすると、霧が立ちこめてきた。その深さといっ

たら20メートル先はまったく見えな

い。友人の車はほとんど先に行ってしまった。急カーブ続きで、全然スピードが出せない。オバケ話に興じていた後ろの女の子たちも押し黙って泣き出しそうな気配。助手席の友は安らかに眠りほうけていたけれど。

後ろからは別の車がぴったりついてあおつてくる。Mのイライラと不安は頂点に達しそうだった。不幸は重なるものでガソリンもあとわずか。節約のために冷房を消して、窓を開

けたら、何かが車の中に飛びこ

ってきた。蛾が、5匹も。「ギヤー」とか「キヤー」とか、絶叫と雄叫びが満ちたわけである。

まあ、やつこの思いで八甲田山を抜けることができたのだが、山を下

りる直前に、野生の子キツネが1匹。驚いた様子もなく車の向かう方向に走ってくる。「ミエで、山道に來ちゃだめだよ」と諭されるようだった、とMは言うのである。

蕪村の句に——

公達に狐化けたり宵の春
すると、あれは……。

(哲)



総

合政策学部の黒田絵美子助教

授(英文学)はゼミでアメリカ演劇なども扱う多彩な授業展開で知られるが、もうひとつの顔がある、らしい。それも落語の脚本家という顔が。

夏の日、その実体を探るべく、演劇に興味のあるT(総政・3年)は黒田先生の新作落語をのぞいてみることにした。Tは、総合政策学部10周年行事(ことし6月)で「トランス」という芝居を黒田先生と一緒にやった仲でもある。

先生は掃除のお

ばさん役、Tはオカマ役……光る汗の熱演で、ずいぶん息の合ったさまが大いに男子学生らをヤキモキさせたという話もある。

出かけた場所は深川江戸博物館。その日はすぐ近くの隅田川で花火大会、ぼんぼんと大輪の花が夜空を染めていた。しかし花火なんかには目もくれず、Tは寄席会場へと足を向

けた。

「一席おうかがい」したのは、真打ち、さん喬師匠。黒田助教教授の手になる新

作演し物は「こわいろや」。

他人の声をマネして時の有名人ら

を戯評する、声帯模写のはしり。むかし「こわいろや」とよんだ。こわいろやには幼馴染のおきみというかわいい娘がいた。こわいろやは兄

貴分のたけ兄から「俺の声でおきみちゃんに告白してくんねえか」と頼まれる。こわいろやもおきみに想いを寄せていたが引き受けて……という「声のサヤ当て」——恋物語なのである。

さん喬師匠は声と顔も自在に、何人もの人間を

演じ分け、笑いあり、ペーソスあ

りの熱演。観客と一緒にTは高座を

たつぷり堪能した。そして、改めて黒田先生の芸域の広さにも。

終演後、ニコニコ顔の先生と会った。「今日は来てくれてありがとう。またやるからよければ、来てね」「もちろん、行きます。他の連中も一緒に」

多摩キャンパスに、隅田川ならぬ「黒田川」。芸達者な先生もいますよ、という打ち明け話。

(龍)



キャンパス

あ
る休日の多摩グラ
ウンド。コーチも

監督も来ない日だったが
武道系某部部長のMクン
らは自主練習で汗を流していた。

ふと、グラウンドの片隅からこっ
ちをじっと見つめている男性に気が
ついた。何だ？と最初は不審に思っ
たものの、Mクンはジーンときた
……。

休憩になって、「部長、あの入
部でしようか」と不安顔の部員に、

「ふっふっふ後輩クン。あの人は
きつと3年生か
4年生だよ。今
さら入部はでき
ないしなあと思いつつ、しかし彼は
楽しそうな俺たちを見ずにはいられ
ないのさ。そうに違いない！」

汗顔のビール券

先輩も入部希望者に見える

「そうでしょうか……」

練習が再開されても男性は居続
けた。顔には出さないが、Mクンも
突き刺す視線が気になって仕方がな
かったのである。

すると、男性がツカツカと歩み
寄ってきた（Mクン、ドキドキ）。

「すいません」

（来たっ）

「僕、この部のOBなんですけど」
「ああ、はい、えっ!?」

よくよく聞けば、ひと昔前この部
にいた方で、今は関西に住んでい
るが、たまたま仕事で東京に来たつ
いでに学校に立ち寄ったとのこと。

「モノレールとかCスクエアとか
できてさ、変わっちゃったなあ、っ
ていろいろ見てただけけど、部は
今もここで自主トレしてるのか気
になってね。それだけ見に来ただけ
ど、変わってなくてうれしいよ。コー
チと監督にもよろしくね。あ、じゃ

あこれ……」

男性はそれだ
け言うとMクン

に封筒を握らせ、お帰りになった。
封筒の中身はビール券。うれしはず
や、みんなでありがたく使わせてい
ただきました、という話だが、居心
地が悪かったのはMクンである。

「OBならOBって言ってもらえ
ばよかったのにナ。遅れた入部希望
者か。あー心臓が悪い」

人を見れば入部希望者に見える、
入部希望者ヒデリの苦惱でもあろう
か。

（兎）